

聖書:創世記17章1～8節

説教:わたしは彼らの神となる

はじめに

先週からアドベントに入りました。神が救い主を遣わしてくださることは、旧約の時代から預言者を通して何度も語られておりました。それでイスラエルの人々は、救い主をずっと待ち望むこととなります。それがアドベントの意味でもあります。ところで、いつ来るかわからない救い主を待つことは簡単なことではありません。イスラエルは待ちきれなくなつて、ほかの神々のところに走ってしまったこともしばしばです。神は、そのたびに預言者を送って警告を与えるのですが、人々は預言者を迫害して、聞く耳を持つともしません。イスラエルの歴史はそんなことの繰り返しです。こうして人は神を何度も裏切って信頼関係は壊れてしまう。普通ならどうなるでしょう。「約束はなかったことにします」と言われても、文句は言えないでしょう。ところが神は、約束どおりに救い主イエス・キリストを遣わしてくださいました。どうしてそこまでするのでしょう。

いったい神は、どのような約束を語っていたのか。そのことを調べていくと、神が交わしてくださいました三つの契約にたどり着きます。一つ目はアブラハム契約、二つ目は通称シナイ契約と言っていますが、モーセと交わされた契約、そして三つ目はダビデと交わした契約です。今日はそのうちのアブラハム契約を見ていきます。

1 アブラハム

1) 主を信じた

アブラハムがどんな人であったのか、簡単に振り返ります。彼は神の声に従って生まれ故郷を離れてカナンへの地に向かうと、神は「あなたの子孫にこの地を与える」との約束をいただきました。ところがアブラハムには、血のつながった子どもがいません。「あなたの子孫に与える」と言われても、妻も自分も高齢ですから本当とは思われません。このまま子どもが生まれなかつたら、江戸時代のお家取り潰しと同じで、一家離散という大変な事態が待ち受けています。それを考えたら夜も眠られない。そんな日が続いたとき、神はアブラハムに、「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。あなたの子孫はこのようになる」と語りかけます。アブラハムはそれを聞いて「主を信じた」と15章6節に書かれています。とは

言え、依然として子どもは与えられないまま時間が経っていく。それが今日の箇所の背景です。

2) わたしの前に歩む

1節を読みます。「さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。』」

神は二つのことを語っています。一つは「あなたはわたしの前に歩みなさい。」言い換えれば、「いつも神を見上げながら」とか、「神から離れずに」とか、「神に聞きながら」歩みなさい。そんな意味になるでしょう。私たちも信仰者としてアブラハムのように「神の前に歩む」者ですから、このことについてはあらためて説明はいらさないでしょう。

3) 全き者であれ

問題は二つ目です。「あなたは全き者であれ。」これは言い換えれば「傷がない者」とか「間違つたところがない」、もっと言えば「罪がない」、そんな意味になります。でもどうでしょうか。神の前に歩むことはなんとか心がけたとしても、罪がない人間になりなさいと言われて、「はい、今日からそうします」と言えるようなものではありません。全き者、罪なき者になれないので、私たちは教会の門をくぐって主イエスの救いをいただかなければならなかったのです。アブラハムだって同じです。それなのに、どうしてこのようなことを言われたのでしょうか。

2 神

1) 契約を立てる

そのことはまた後で見ることにして、2節を読みます。「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。』」

ここで契約とはどういうことか、ちょっと考えます。たとえばある人とおカネの貸す場合、高額の場合は必ず契約書というもの交わします。それで相手の人が約束を破っておカネを返してくれないときは、この契約書を証拠にして弁護士を立てて裁判所に訴えます。つまり、安心して契約書を交わすことができるのはどうしてか。万が一のことがあ

れば国が後ろ盾になって救済してくれる、そういうシステムがあるからです。

2節で、神はアブラハムと契約を立てると語られました。人間の世界の契約では、後ろ盾になるのは国でした。では、神とアブラハムの契約においては、だれが後ろ盾になるのでしょうか。この世界には神より優れた権威はありませんから、神ご自身が契約書の後ろ盾、権威となります。でも国の場合は、裁判所とかそういう目に見えるものがあるので信用できる。ところが、神が後ろ盾と言われてもなににも、神は見えません。そんなものを信用してよいのか。何しろ最近は何事もない世の中ですから、初めての方はなおさら、信用してよいのかと疑うでしょう。そのことも後で触れたいと思います。その前に神が立ててくださる契約の内容を見ていきます。

2) あなたの神となる

いろいろありますが、今日は7節に目を留めます。「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」

ちょっとへそ曲がりな方はこんなことを言うでしょう。「こちらからお願いしたわけでもないのに、勝手に決めつけないで欲しい。こちらにも神を選ぶ権利がある。」神に縛られたくない。人間は自由だと言うわけです。これはいつけんすばらしい考え方のように見えますが、一つだけ問題がある。神を自由に選びたいと言いますが、では正しい神を選ぶことができるのか。あるいは、神などいらなくてもいいのでしょうか。ほんとうに神がいなくてもやっていけるのか。この世界を見てください。どうしてこんなに問題だらけになってしまったのでしょうか。だれかがこう言います。「こうなのはあの人のせいだ。国の政治が悪い。」そうかもしれません。では、自分自身はどうなのでしょう。自分は悪くないのでしょうか。そんなわけはありません。たたけばほこりが出る身です。そんな私たちが平和をつくろうと努力してきたはずでした。ところが、「平和のために戦争をする」とか、「戦争とは平和のことである」と言っただけから時代になってしまいました。

これだけ見ても、私たちには正しいものを選ぶ力がないことがわかります。だから神ご自身が語りかけるのです。「わたしはあなたの神となる。」それは、私たちが神の奴隷となるということではありません。むしろ罪の縄目に絡め取られて、罪の奴隷となっている私たちは罪から解放して自由するために、言っただけなんです。

3) あなたの後の子孫の神となる

でもこう思う方がいるでしょう。「これはアブラハムのこと、私たちには関係がない。」そうでしょうか。神はこう言われました。「わたしは、あなたの後の子孫の神となる。」アブラハムだけでなく、彼の子孫にも言われた。では、アブラハムの後の子孫とは誰のことか。やはり私たち日本人には関係がないのでしょうか。

3 やがて来られる救い主

1) アブラハムの子孫とは

結論だけ言いますと、ガラテヤ書3章29節にこう書いてある。「あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」

このように、アブラハムの子孫とは、キリストを信じるも者のことで、民族とか血のつながりとか、言語や文化はまったく関係ありません。アブラハムに語られた契約はユダヤ人はもちろんユダヤ人以外のすべての人にあてはまる。

2) キリストのものとなる

でも無条件ではない。条件がひとつだけある。「キリストのものであれば」です。いったい「キリストのもの」とはなにか。どうしたらなるのでしょうか。アブラハムが「全き者となれ」と言われたのはどうしてだろうかと、最初のところで疑問に挙げていました。実はそのことと大いに関係があります。先ほども見たように、もしすべての人が「全き者」となるのなら、この世界は随分と住みよくなっていたはずですが、ところが、どうやっても全き者になれないので皆困っています。それほど難しいことなのですが、どうして神は「全き者」になれと言うのでしょうか。もっと努力しなさいということでしょうか。

そうではありません。「全き者であれ」と、そこだけ切り話して読んでしまうからわからなくない。ここは、直前のことば、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩みなさい。」これとセットになっている。

「わたしの前に歩む」とはどうすることか。具体的に考えます。聖い方のそばに近づけば近づくほど、聖い光が私たちに照らします。そうしたら今まで見えてこなかった罪が見えてくるので、「私は罪人です」と告白することになります。それが神の前に歩むという現実です。

そんな私たちをご覧になって神はどうされるのか。「わたしにはあなたの問題は解決できません」と言ってさじを投げるのか。反対です。なにしろこの方は全能の神なのです。罪を必ず解決するという約束をします。それがアブラハムと交わした契約の内容です。

でも、この契約は信用してよいのでしょうか。後ろ盾である神を信用してよいのでしょうか。神がアブラハムに語ったことを、そのとおりにしなかったというのなら、信用できなかったでしょう。しかしこの方は語ったとおりのことをしてくださいました。いったい何をしたか。御子イエス・キリストを私たちのところに遣わし、十字架で罪の処罰を受けられました。神は言われました。

「わたしはあなたの後の子孫の神となる。」どこに神はおられましたか。十字架の上におられました。アブラハムに語った契約はこのようにして果たされていきます。

それでも信用できないのでしょうか。でも、神のひとり子がいのちを捨ててくださるのです。私たちが信じるために、これ以上、神に何を要求するのでしょうか。必ず約束を果たしてくださる神であることを信じて、私たちは待ち望みながら歩んでまいります。